

2020年度
修士学位請求論文

近代の小学校国語教科書の語彙における
「教育的配慮」

国際日本学研究科 国際日本学専攻

日本語学・日本語教育学研究領域

4911194003

浅野 萌花

第Ⅰ章では、研究背景ならびに先行研究を整理し、それらを踏まえて研究目的を設定した。国語教科書の歴史を遡ると、江戸時代には寺子屋にて往来物が使用され、明治時代になると『尋常小学読本』や国定教科書が次第に編纂されるようになっていく。しかし、明治初期は教育基盤が固まっておらず、『尋常小学読本』や往来物が混在して使用されていた。そのため、近代の国語教科書の語彙に着目した研究は成果が乏しいが、国語教育が確立されていく近代は、国語教育史や語彙史等を解明していく際に、無視してはならない重要な時代だと捉えられる。

また、明治初期の国語教科書は子どもの学齢や漢字の提出順序や難易度は配慮されていなかったと指摘されているが（古田 2013）、明治後期になると「基本語彙」に相当するものがあることが確認されている（島村 1999）。したがって、編纂年を経るにつれて、学年や語彙のレベルなどに関する配慮が施されるようになったことで、明治初期と明治後期とで語彙の在り方に違いが生じているのだと推測される。そして、近代の国語教科書の語彙には「教育的配慮」と呼べるものが存在し、それによって使用される語彙が変化しているのではないかと想定できる。

そこで、本研究ではコーパスを用いて、近代の小学校国語教科書の語彙を頻度から整理し、教科書における語彙の変化を解明することで、どのような「教育的配慮」が働いているのか考察を行った。分析する際には、井上（1958）に則り、明治初期を自由編纂時代・明治中期を検定制度時代・明治後期を国定教科書時代という3つに区分し、さらに国定教科時代は国定Ⅰ～Ⅵ期に区分している。なお、自由編纂時代・検定制度時代に関しては、既存のコーパスがないため、本研究の基礎資料として自ら作成を行った。

第Ⅱ章では、品詞構成・語種構成を指標として、近代の国語教科書の語彙における語彙変遷の全体的傾向を考察した。また、編纂年を経るにつれてどのような語彙が増減しているのか、国定教科書を対象とし、増加傾向係数を用いた調査を行った。

まず、語彙変遷の全体的傾向としては、名詞と漢語が減少傾向にある一方、動詞と和語が増加傾向を辿っている様子が窺えた。そして、増加傾向係数を算出することにより、漢語から和語への交替をはじめとして、同じ意味を持つ語彙間にて入れ替わりが生じていることを明らかにすることができた。

第Ⅲ章では、当時の書き言葉としての代表性が保障される総合雑誌『太陽』と国定教科書の語彙変遷を考察した後に、累積使用率を用いて両媒体の語彙のランク分けを行うことで、国定教科書における語彙の特徴を探った。

語彙変遷を見ると、両媒体ともに名詞と漢語が減少、動詞と和語が増加という第Ⅱ章と同じ推移が確認された。しかし、『太陽』よりも国定教科書の方が増減率が高く、増減する時期も早いということから、国定教科書ではいち早く日本語の変化を取り入れようとしていると言える。加えて、副詞は国定教科書では増加しているのに対し、『太陽』では減少して

おり、正反対の方向へと推移していることも明らかとなった。

続いて、『太陽』と比べた際の国定教科書における特徴語・反特徴語の分析を行った。副詞に着目すると、特徴語としてはオノマトペが多く抽出され、反特徴語としては文語性が強い副詞が抽出された。これより、国定教科書では文語性が強い副詞の使用を避け、代わりにオノマトペを積極的に採用していることが解明された。

第Ⅳ章では、国定教科書時代全6期の語彙を対象として全体的傾向を把握した。その後、国定Ⅱ期・国定Ⅲ期に限定し、初出学年を用いて語彙配当の分析を行うことで、国定教科書における学年ならびに編纂年による語彙の違いを考察した。

まず、国定教科書時代全6期における語彙を対象とすると、学年差を探ったところ、学年が上がるにつれて名詞・漢語の使用率が増加する一方、動詞・和語の使用率が減少していることが判明した。また、これらの相互関係を探ると、“国々”から“諸国”への交替を代表例として、和語名詞が減少している代わりに漢語名詞が増加している様子が確認された。また、接続詞も学年が上がるに伴って増加傾向を辿っていたが、語彙の入れ替わりが要因とは考えにくいため分析したところ、機能が拡張していく様子が窺えた。

続いて、編纂年による違いを考察した。その結果、国定教科書時代の中でも国定Ⅱ期から国定Ⅲ期にかけて名詞が減少し、動詞が増加している様子が目立っており、さらに、国定Ⅱ期と国定Ⅲ期とでは、中学年から高学年にかけて、名詞と副詞が異なる推移を辿っていることがわかった。

そこで、国定Ⅱ期と国定Ⅲ期における高学年の語彙配当の違いを初出学年を用いた分析を行った。その結果、国定Ⅱ期では高学年を初出とする漢語名詞を用いている箇所に関して、国定Ⅲ期では初出の和語名詞または、低学年・中学年にて提示済みの語彙を用いていることから、国定Ⅱ期と比べると国定Ⅲ期は高学年であっても、漢語名詞を避ける傾向にあることが判明した。

第Ⅴ章では、第Ⅱ～Ⅳ章の分析結果を整理することによって、編纂年と学年という大きく2つの観点より、複数の「教育的配慮」が働いていることを明らかとした。そして、国定Ⅱ期から国定Ⅲ期を機として、「教育的配慮」が大きく転換していくのではないかということを見出した。